

だから人間は滅びない - 天童荒太、つなげる現場へ -

## 自分たちで身を守る土台作り

大規模災害訓練主導するNPO法人

産経EXPRESS (P.18-24)  
平成26年11月29日号

今年1月に行われた訓練ではD I Gと呼ばれる参加型災害図上訓練が取り入れられた (いずれも島晃撮影)

作家・天童荒太さん(54)が、社会を支える現場を訪ねる不定期連載「だから人間は滅びない」。東日本大震災の被災地で子供たちの教育に携わる2人の若者との対話から始まったこの旅も、今回で最終回となる。

震災から3年8カ月。今年8月に発生した広島土砂災害など、日本は多くの災害に直面し続けている。最終回では、全国的にも珍しい民間主導型の大規模災害訓練など、災害に備えるつながりづくりを行っている「すぎとSOHOクラブ」(埼玉県杉戸町)と「NPO埼玉ネット」(さいたま市北区)の2つのNPO法人を訪ねた。



NPO法人などのリーダーが集まり、災害時の動きを確認しあった

「ヘリコプターで上空から確認したところ、海岸に津波が押し寄せている」「液状化が発生して一般車両の通行ができない」一。緊迫感のある報告が飛び交う。これは、今年1月、杉戸町で開催された「協働型災害訓練」の様子だ。杉戸町、福島県富岡町、川内村の自治体や消防に加え、市民救助隊、医療機関、炊き出し支援部隊、さらには全日本救助犬団体協議会や自家用航空機を活用して災害支援にあたる団体まで、さまざまな活動を行う150団体から、のべ約350人が参加した。民間主導型で、これだけの団体が参加して行われる訓練は、全国的にもまれだ。

## 震災支援きっかけ

《首都圏直下型地震が発生。杉戸町では自治体内の要救助者を救助するとともに、後方支援自治体として首都圏からの避難者を受け入れる。そのとき、行

政からの要請をもとに、民間団体は何かできるのか》一。これが訓練での想定だ。自家用ヘリで上空から情報収集にあたり、救助犬を派遣したり。それぞれの団体が、それぞれの役割を確認しあった。

訓練を発案したのは、「すぎと〜」と「埼玉〜」。訓練の統括責任者で、2つの団体でそれぞれ副理事長と事務局長をつとめる豊島亮介さん(39)は、民間主導の訓練の意義をこう語る。

「災害発生時の支援には、自助、共助、公助の3種類がある。そのうち7割を占めると言われているのが自助です。震災時にも公の支援が期待できない状況が発生していた。いかに自分たちで自分たちの身を守るか。そのための土台作りです」

なぜ、杉戸町という埼玉県の小さな町で、これだけの大規模訓練が実現できたのか。震災時に生まれた「つながり」がその源流にある。



# 埼玉と福島の絆 強くなって未来へ



災害時には温かい食べ物は何よりのごちそうになる (いづれも島晃撮影)

## ➔ 「仲間、助けにいかなきゃいけないべ」

震災発生直後、「すぎと〜」の小川清一理事長(70)は、1000食分の食料を持って、杉戸町の友好姉妹都市である富岡町民が避難する川内町へと駆けつけ、炊き出しを行った。

その後、避難区域が拡大し、川内村も全村避難へ。小川さんが食料とともに杉戸町長の手紙を持って行ったことがきっかけで、杉戸町と周辺の幸手市、宮代町で、富岡町、川内村の約200人の避難を受け入れることが決まった。

## 知り合いの知り合い

一方、「埼玉〜」は、「市民キャビネット災害支援部会」として、被災地支援に向かったさまざまなNPOのとりまとめや後方支援をしながら、自らも物資や食料の移送を行っていた。「知り合いの知り合いだったり…いろんな所からSOSが届い

ていた」と「埼玉〜」の松尾道夫代表理事(67)は振り返る。

その後、2つの団体は共同で復興支援を開始。食料や物資などの初期の直接支援だけでなく、首都圏に避難している人たちのコミュニティーづくりや、帰村宣言をした川内村で復興祭を開くなど、長期的な交流・支援を続けてきた。

そんなとき、国土交通省が全国から「広域的地域間共助」事業を募集していることを知る。

「広域的地域間共助」とは、離れた地域同士が普段から交流をすることで、災害発生時に互いに助け合えることを目的にした事業のことだ。

「自分たちは実際に避難をし、受け入れるという立場を経験してきている。ただつながるだけではなく、より実効的なものにできないか。そんな思いから、訓練の企画が持ち上がった」(豊島さん)。事業に選定され、2団体と2町1村で協議

会を設立。震災後の支援体制などを精査し、その成果として訓練を開催した。

## 正確なシステム必須

訓練では、インシデント・コマンド・システム(現場指揮システム、ICS)を取り入れた。災害時の指揮系統や管理手法をスムーズにするための世界共通のシステムだが、日本ではまだ普及していない。「災害時は情報の混乱が障害となる。実際の支援活動を通じて、迅速かつ正確に対応できるシステムづくりが不可欠だと感じました」(豊島さん)。

国土省の事業は終了したが、訓練は手弁当で来年も行う予定だ。

「せっかくできたつながり。これだけで終わらせるのはもったいない」と豊島さん。震災で生まれた「つながり」は、新しく、そして強いものとなって未来へとつながっていく。



④災害時に自家用ヘリを情報収集に役立てようと離発着訓練も実施  
⑤災害救助犬も出動!



# 「人のため」が「自分のため」になっていく

## 「すぎとSOHOクラブ」

〈杉戸町で起業支援やまちづくりなど、幅広い活動を行ってきたNPO法人「すぎとSOHOクラブ」。小川清一理事長と豊島亮介副理事長が迎えてくれた〉

天童荒太さん（以下天童） もともと小川さんが3・11の震災直後に友好都市だった富岡町の支援に行ったのが、今回の訓練につながるきっかけとなったわけですね。

豊島亮介さん（以下豊島） 道路も規制がかかって車両が入れない中で、小川は杉戸町長に手紙を書いてもらったんですよ。「こいつら炊き出しにいくから通してやってくれ」と。当時、富岡町民は川内村に避難していたんですが、そのうち避難区域が拡大して、川内村民も避難しなければならなくなった。みなさん郡山市に向かうことになったんですが、移動手段がない。そこで、富岡町の町長が、うちの町長に電話かけてきて、どうかしてほしいと。町長が号令かけて、7台のバスで郡山へと運んで、首都圏にも避難したい人は来てくださいと。約200人受け入れることになった。とはいえ公共施設が足りないの、隣の幸手市、宮代町に声をかけて。

### いざという時に役に立つ

天童 余震や放射能の問題などどんなリスクがあるか、また、本当に助けになるかどうか未知数のなか、ともかくぱっと行動できてしまうところがすごいですよ。

小川清一さん（以下小川） 杉戸町は江戸川・古利根川の流域にあります。もともと「川」を通じて、いろんな自治体と交流があった。その中に新潟県山古志村（現長岡市）もいて中越地震のときの困った状況を学んでいたから。

豊島 あっちで困ってるときこっちで助けるのって大事だね、という広域的共助みたいなことを、山古志村とのつながりで学びましたね。災害のニュースを見て大変だなと思って、住んでいる人の顔までは思い浮かばない。でも、知り合いとかがいると、顔が思い浮かぶ。

小川 震災が起きたと聞いて、きっと備蓄品じゃなくて、生鮮品や温かい物を食べたいだろうと。われわれは普段か



「すぎとSOHOクラブ」で小川清一さん（右）、豊島亮介さん（左）と語る天童荒太さん。「すぎと〜」の活動は起業家支援からまちづくり、子育て支援に里山再生と多岐にわたる（いずれも塩塚夢撮影）

ら、イベントとかで「カップ汁」って名付けたすいとんを販売していたんですね。主食にも副菜にもなるからと。そういう積み重ねがあったから、災害時にこういう風にすればいいか分かった。

天童 それは、普段の暮らし、日常的な地域活動をおこなっているときから大きな災害を意識されていたということ？

小川 そうそう。まずは自分たちが楽しんで、いざという時には役に立つものをと。

天童 今回の「協働型災害訓練」ですが、改めて具体的にお聞かせいただけますか。

豊島 1日目は図上訓練。そのベースとなったのが、ICSという防災言語ですね。どんな地域の人が集まっても、一発で災害対策本部が立つ。日本ではあまり標準化されていないのですが、それは困るでしょ。2日目は、炊き出しとか、自家用ヘリの離着陸訓練とか。各自治体もヘリ会社と契約しているんですが、台数が少ないのでいざというとき奪い合いになって使えない。そんな中、自家用ヘリを活用して情報収集をしよう。

天童 小さな町とNPOが主導するには、とても大がかりですね。いったん話は戻るのですが、小川さんの「助け

なきゃ」という気持ちの根底にあるものは何ですか？

小川 単なる正義感。あとは人間性だね（笑）。もし行政が支援をしようということになっても、生鮮品とか、温かい物を食べたいだろうという発想は出てこない。でも民間はそういうことができるから、地域活動のNPOをやっている。

天童 人間性か。いや僕は、人はなぜ人を救おうとするのかということに関心がすごくあるんです。貧富や貴賤の差が是認され、争いや暴力が絶えないこの世界がなんとかここまでやってこられているのは、人が人を救おうという行動をとっているからで。

小川 まさにそういう気持ちでやっている。人も大事だけど、地域を救おう。そういうことが、人のためといいつつ、自分のためになっていく。そういうのがあって、町おこしだったり、社会的弱者の自立支援とか、高齢者の居場所作りをやってきた。災害支援もその中の一つ。

天童 でも誰にでもできるわけではない。誰かを救おうなんて、気持ちのない人はもちろん、あっても普通働けない。小川さんができてしまうのは、個人的な生育環境、育ちもあるのでしょうか？

小川 それはあるかもしれないなあ。うちはね、兄貴も元町長で、親も議員やなんやっていた。何が正しいのか、肌で感じて育ってる。ゴミ処理場がなかったとき、自分の土地に生ゴミを受け入れたらね。

### 他人の欲かなえたい欲求

天童 震災の支援でいえば、杉戸町は負担ではなかったのでしょうか。公的施設を避難所に提供したり、生活上の不都合もあつたと思いますが、町民の感情面など率直なところを…。

豊島 こういうのって、「他人の欲をかなえたい」という欲求の一つで、奉仕

ではない。だから、負担と天秤にかけることではないと思うんです。町民も団結したし、震災や防災に興味持つ人が増えた。行政も避難所の運営というノウハウが持てましたし、いい効果が生まれた。

天童 巨大災害が起きたとき同時に被災しないだろう遠隔地に逃げ場所を持っておくということは、お互いにとって精神的なゆとりとなるでしょうね。田舎というバックボーンを持ってなかったり縁が切れてたりして、万一のときの避難先がない、自給自足できない、そういう不安が、無意識のうちに都市に住む人々をいらだたせている面があると思うんです。今回のような取り組みは人々の精神のあり方にも好影響を与える気がしますが、今後広がってほしいという思いはありますか。

豊島 杉戸町は首都圏から30キロ近く、地盤もしっかりしてる。畑もあるから自給自足もできる。そういう場所が後方支援自治体として名乗りを上げる。

今回、全国のNPOと結んで訓練を開催しましたが、すべてをこちらでコントロールするのは難しい。こういう集まりが増えていって、「うちは医療に特化します」とかできればいいなと。そういう場所をたくさんつくれば、首都圏直下型地震が起きたときに役に立てる。

天童 いろんな人や場所とつながってみて、実際のところどうですか。

小川 やっぱ、人間だから、いい人も悪い人もいるけど。そんな中で、先日もあるイベントで助けた人がお茶菓子持ってお礼に来てくれてね。ささやかなことだけど、やってよかったと思う。1年に何回か、あつたかい気持ちになることがある。何物にも代え難い。マスターベーションかもしれない。でも、そういうことしていかないと、生きてる価値ないじゃない。

## 「すぎとSOHOクラブ」

### 小川清一理事長

おがわ・せいichi 1944年埼玉県杉戸町生まれ。日本電信電話公社（現NTT東日本）を経て、2002年にNPO法人「すぎとSOHOクラブ」を設立。



# 原点は阪神大震災 支援の輪拡大

## 「NPO埼玉ネット」



豊島さんの案内のもと、「NPO埼玉ネット」の松尾道夫さん（右）とも対談した天童さん  
—さいたま市北区（野村成次撮影）

《もう一人のキーマンが、「NPO埼玉ネット」の松尾道夫代表理事だ。豊富なNPO同士のネットワークを持ち、多種多様な団体の参加を実現させた。「埼玉～」の事務局長も務める豊島さんの案内のもと、松尾さんを訪ねた》

天童 先ほど小川さんにもお話をうかがって、助けるにせよ助けを求めるにせよ、緊急時にリーダーの果たす役割がいかに大きいかということを実感させられています。やるべきことだと腹を決めた個人が動くことで、周りや組織が動きだす。松尾さんも豊かな人脈をいかして、震災直後の支援だったり、今回の訓練につながられた。その原点は？

### 事務所賃料3000円払えず

松尾道夫さん（以下松尾） 一番最初は、フリーマーケットのNPOをやっていたんです。お祭りが好きなんです。そういうお祭りと、市民活動がうまくつながればと。フリマをやりながら熱気球をあげるとかいろいろやっています。2004年、現在の埼玉県知事が当選して、埼玉を日本一のNPO立県にすると言いました。そこでNPOにオフィスを提供しようということで、「埼玉県NPOオフィスプラザ」というNPOの支援施設を作

った。そこにわれわれを含め14団体が入居した。マンションの自治会のようなものが作られて、その委員長が私に。そこで、せっかくNPOが集まったんだから、そこがレベルアップする必要がある。その上で、港区にある「みなとNPOハウス」をモデルにした。「みなと～」には全国的なNPO法人が入っていて。そこからNPOの運営の仕方をサポートしてもらおうようになって、NPO同士の連携のような取り組みに私の方もなっていた。

NPOといっても、事業規模が300万円以上のところ、全体の3割あるかどうかというぐらい。事務所の賃料3000円も払えないNPOがほとんどです。そういったNPOが活動を広げていこうという取り組みの一つとして、代々木公園で「NPOまつり」というイベントをやったり。

そんなことをやりながら、一方で、NPO法の成立には、阪神淡路大震災があったから、そこを忘れてはならない。NPOの原点はそれだから、災害支援やっという。オフィスプラザに災害救助犬の団体のメンバーが出入りしたり、阪神淡路大震災の時に支援をしていた団体のメンバーと知り合ったり、そういったつながりがどんどん広がって、災害支援をやるようになった。

天童 根本的な質問ですが、なぜこれほどNPOが増えてきたのか、つまりなぜみなさんNPO法人を作るのでしょうか。

松尾 NPO法人の認証を取れば、行政の支援を受けやすくなるという人もいますね。もちろん、そこには基本となる事業がないとダメ。行政としては、どこかの株式会社とか、任意団体とかよりは、NPOの方が支援しやすい。寄付金にしても、会社に寄付するって違和感がありますよね。フリマのように事業性が高いような団体の場合は有限会社にしてし

まってもいいと思いますが、災害支援などに関わる団体は、NPO法人の認証を取得するのがいいのではないかと。

### 一つの働き方として存在

豊島 松尾さんの世代はそうかもしれない。彼らは社会運動の一つとしてNPOをとらえていて、NPO法ができたときは、彼らにとって春だった。

けれど、僕らにとっては、NPOというのは一つの働き方として存在している。アメリカだと、就職したい企業の上位3位がNPOだったりというのが普通。日本もそういう時代にいずれなるでしょう。働き方として精神衛生上も悪くないです。

天童 若い人は、そういう精神的なメリットが大きい？ 大企業で組織の歯車として働くより、収入は低くても自分本位で仕事ができる面で精神衛生上いいや、と。

豊島 若い人の中には精神的に弱く、そこに逃げ込んでしまっている人もいます。一般企業では無理だけど…みたいな。現在のよう成熟社会の中では、必要というか、あるべくして（NPOが）できているのかな。

NPOと株式会社の違いは何かと聞かれたとき、「資本です」と答えています。株式会社は資本があります。資本家にとって資本を投入することは、配当という不労所得がもらえる。けれど、NPOは、資本をもたない。ただ、ボランティアではない。儲けをだしてもいい。その代わり、再分配はしないよ。発生するのは、その事業に直接関わった労働に対する給与だけです。だから、先ほど僕が働き方の一つだと言ったのは、NPOなら小回りよく、自分たちの思いがいかせるということ。大きな組織になると、食べていくためにしょうがないこともやらざるを得ないこともある。

天童 思いをいかすというのと重なるかもしれませんが、松尾さんの活動をお聞きしていると、社会にとって必要なことでも収支としては赤字ということがわりとあって、ご自身の持ち出しも少なくない。そうまでして、なぜ人を救おうとするのか。そこには何があるのでしょうか。

松尾 あんまり気にしてない（笑）。豊島 元祖社会起業家なのかもしれない。松尾さんたちは。余計な利益をとらないで、次のために投資していく。ためるより、どうせなら楽しいことに使おうよ、と。NPOまつりだったり、そういう場所を松尾さんたちが作ってきて、その積み重ねで、今回の訓練でもあれだけのNPOが参加できた。

松尾 そうね。その都度「お金がかかるから、採算が」とかいたら何もできないのよ。災害支援なんて絶対出来ない。いくらになるかわかんないんだもん。どうにかなるかな、なんて。

それにね、震災の時はSOSのファクスが、くるんですよ。今こういう状態でどうしようもないと。切々と書いているのね。物資を一つでもいいから出してくれと。1便でもいいから、出そうと。その辺は行政とNPOの根本的な違い。行政はあまねく公平にが原則ですが、NPOは違う。自分たちで判断すればいい。あるところに特化してもいい。行政だと、「なんだあそこばかり」と言われる。私たちは、必要だと思うから、やっている。そこがNPOのいいところです。

そのよさをいかそうと、情報の取り方にもルールを決めている。NPO同士でメーリングリストを作って、震災のときもその情報を元に支援に動いたのですが、そこにはマスコミに出た情報はあけてはいけないことにしている。マスコミの情報は、みんなが知ってるから、そこにワットと集中してしまう。そうすると物資も人も余って、結局ムダになる。

「誰々から聞いた」という情報もダメ。噂だから。行くと空振る。平時のいろんなつながりを持っていることが大事。この人が言うなら…と信頼できる。信頼できる人から信頼できる情報がきたら、彼らにとっても信頼できるわれわれが、そこに支援をしていく…というのが効率的。

そういう考え方だから、「なんでやるんですか、赤字なのに」と聞かれれば、信頼関係があるところはやらざるを得ない面がある。知り合いが森林を守る取り組みをしていて、その関係で川内村と付き合いがあったりね。そういうつながりが何らかの効果を発揮したよね、というのを経験として持ってる。

＝22面に続く

**特定非営利活動促進法（NPO法）** 市民活動団体に法人格を与え、公共サービスやボランティアなど社会貢献活動の健全な発展を促進して公益の増進に寄与することを目的とする法律。阪神淡路大震災で多数のボランティア団体が活躍したのを契機に、非営利団体が自由度の高い形での法人格を取得できるよう、1998年施行された。

# 離れた地域 顔の見える関係に

=21面から続く

天童 知り合いの頼みだからやる、知り合いだから当然助ける……つまり今必要とされているのは、いかに離れた人同士、地域同士がつながっていただけるかということですね。

松尾 その一つの方法が、「お祭り」でいい。祭りをすることで、離れた地域だけじゃなくて、近所の顔も見えるし。うちのNPOがある地元の商店街のお祭りに、南会津から来てもらったりね。お互いに交流しておけば、何かあったときに役に立つ。川内村は今支援を受ける側ですが、今度首都圏で何かあったら支援したいと言っている。もらえばなし、やりっぱなしじゃなくて、お返しできるような仕組みを作っていく一つのツールでもあります。

## 同時被災のリスクなし

天童 いわゆる親戚づきあいですよ。地縁血縁のない離れた地域に、新しく親戚を作るようなことをやられた。

松尾 川内村に有機農法をしている農家があってね。そこで種付けしたコメを送ってもらって、うちの近所のすし屋ですし飯にして、大宮市場でネタを買って。去年11月の終わりごろ、仮設住宅に行きすしを無料で炊き出ししたりね。避難している人は、川内村のコメを食べられてうれしいし。うちの地元の若いメンバーも、それによって支援の輪に加わる。今度、川内村で商業施設ができるんですが、食堂もいるだろうと。じゃあ、うちの地元の店が定食屋だそうかという話もしてる。行くことによって、顔の見える関係が、つながりができて。首都圏で何かあっても、「コメがない」と言ったら川内村から送ってくれますよ。

天童 同時被災のリスクがない地域がつながるといのは、人々の生存とか救援のためにはもちろん、「いざというときには助けてくれる場所がある」という安心感や精神的なゆとりの面でも、これからの日本にすごく必要ですよ。

豊島 それをさらに深めるのが今回の訓練。他の地域でも地域間共助の取り組みはして、「こういうネットワークを作るので、災害時はこう助け合おうと思っています」というもの。ただ、われわれはすでに実際に経験してしまっているの、その経験と教訓をしっかりとまとめて、必ず起こるであろう首都圏災害に備えようという。松尾さんのことは以前から知っていたのですが、「これまでの活動を帰結させたい。一緒にやってみないか」とって声がかかって。

天童 なるほど。にしても、どうしてそこまでがんばられるのか、という疑問はまだ完全には解けないんですが、松尾さんはどんなお子さんだったんですか？

松尾 うちのオヤジはね、生協の専務理事やってた。市議員もしていたね。影響受けてるのかなあ。絶対政治家になんかならないとは思っていたね。兄貴がオヤジの後を継いで出馬しようとしたら、家族全員で止めた(笑)。

周りには、生協の子供がいっぱいいてさ。「お父さんに普段お世話になってるから、言うこと聞かなきゃいけないよって親に言われた」とるのがぞろぞろ(笑)。

天童 ガキ大将だったんですね、人が周りにいっぱいいるのが好きだった(笑)？

松尾 そうかも(笑)。フリマなんて、毎日お祭りみたいなもんだよね。ストリートミュージシャン集めてライブしてもらったり。

天童 NPOを立ち上げるまでは。  
松尾 大学出てコンピューター系の会社に入って。その後、食品包装資材メーカーに転職して。二十歳そこそこだったけど、電算室長とか社長室長とかやって。そこで経営のことを学んだんだけど、その会社がダメになっちゃった。そこで、自分の資本はなんだと思ったら、「頭だ」と。大学時代なんて、塾と家庭教師で社会人より給料がよかった(笑)。



天童荒太

てんどう・あらた 1960年、愛媛県生まれ。86年『白の家族』で第13回野性時代新人文文学賞受賞、93年『孤独の歌声』が第6回日本推理サスペンス大賞優秀作となる。96年『家族狩り』で第9回山本周五郎賞受賞、2000年『永遠の仔』で第53回日本推理作家協会賞(長編部門)受賞、09年『悼む人』で第140回直木賞、愛媛県文化・スポーツ賞、13年『歓喜の仔』で第67回毎日出版文化賞受賞。

(いずれも野村成次撮影)

それで学習塾を立ち上げたんです。そんな中で、商業施設とか知り合いになって、催事的なイベントとしてフリマをやるか。

## 何かあれば動けるように

天童 人との出会いがここまでつながってきた。松尾さんは、さながら「人とつながるプロ」ですが、コツはありますか。

松尾 普通に、本当のことを話す。それだけです。

天童 来年も同様の訓練を予定されていますよね。首都圏直下型に備えるというのですが、別に政府とか、首都圏の人間に求められてやっているわけではない。なぜ、あえてこれをやっていますか。

松尾 この訓練は一般向けではない。組織化された人を対象にしている。一般の人を組織化するのもありなんですけど、この訓練の主眼としては、各団体が参加して、情報を共有して、何かあったらそれで動けるように。だから、各団体の代表が参加します。

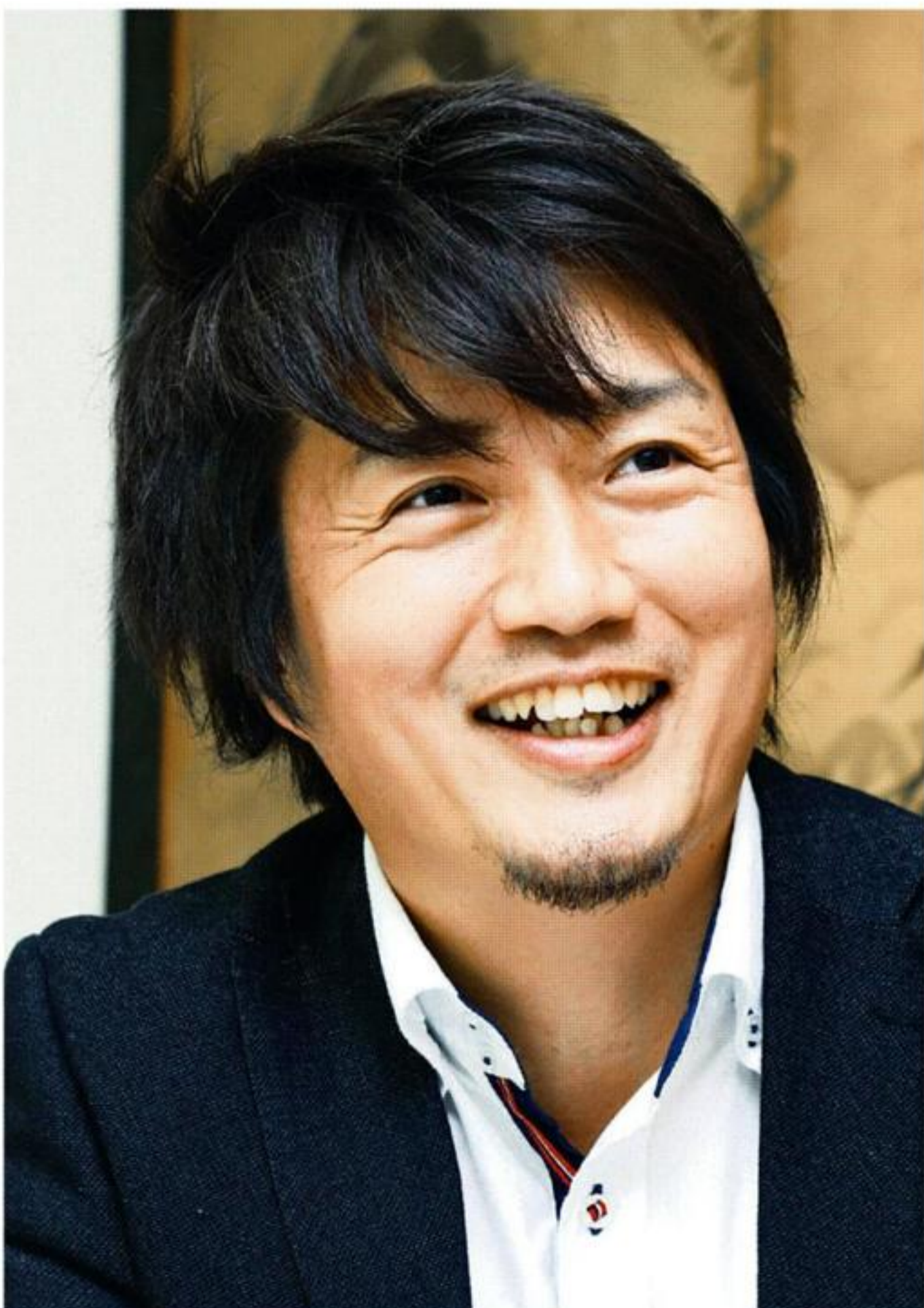
今回の取り組みはフェイスブックでも発信していますが、それを見て、団体の代表の人なりが、自分たちも何かやってみようとなればと思って。そうすれば、平時のつながりも出てくる。何かあったら遠隔地同士での共助もできるだろう。そのためには、今年やって、助成金が終わったら終わりではだめでしょう。費用の面でどうかということもあるけれど、とりあえずやる。それによって、継続性を次の段階まで持たせることができる。

豊島 松尾さんが好きな「お祭り」と一緒ですね。テーマが、災害であったということ。今回のような取り組みを標準化させていくためには、リーダーにいっぱい来てもらって、それを持ち帰ってもらって、広げてもらう。そのために、何回も顔を合わせる。

天童 災害訓練という名のもとに、平時のつながりを強くしていく、と。人と人がつながることが備えになる。同時に喜びともなる。だからこそ「祭り」なのですね。

## 「すぎとSOHOクラブ」 豊島亮介 副理事長

とよしま・りょうすけ 1975年埼玉県浦和市(現さいたま市)生まれ。春日部共栄高等学校、敬愛大学経済学部卒業。IT企業を経て、2006年プロデュース会社「FutureWorks」設立。07年から「すぎとSOHOクラブ」、東日本大震災以降「NPO埼玉ネット」の活動に関わる。



## 「NPO埼玉ネット」 松尾道夫 代表理事

まつお・みちお 1947年長崎県佐世保市生まれ。長崎県立佐世保北高校、九州大学理学部数学科卒業。コンピューターメーカー、食品包装資材メーカーを経て76年、学習塾「教育ゼミナール コンパス」代表就任。2004年NPO法人「フリーマーケット主催団体協議会」設立。12年からNPO法人「NPO埼玉ネット」理事長。

# 「つながる」ことは「備える」こと

対談を終えて 天童荒太

震災直後、この大きな釜で自慢の「カップ汁」を被災者にふるまった。日頃の備えが災害時にいきた  
—埼玉県杉戸町（塩塚夢撮影）

東日本大震災により、「つながる」という言葉が生まれました。この連載は震災で教育の機会を失った子供たちに関わる活動をしている2人の若者との対話から始まりました。最終回となる今回、「すぎと〜」と「埼玉〜」という2つの団体のリーダーにお会いしたいと思ったのは、震災から生まれた「つながり」が、今どういうかたちに発展しているのか、どういう風に人々に受け止められているのかを見られればと思ったからです。

## 「人の笑顔が好き」

日本は、災害を免れない国です。天災だけでなく、少子高齢化が招く人的被害、エボラ出血熱に象徴される新型ウイルスなどさまざまな脅威に直面している。そんな中、「つながる」ことは「備える」ことになるのではないかという考えが芽生えてきました。今回お会いしたみなさんは、まさにそれを具体的な形で実現させた取り組みをされている。ぜひお会いしたいと思いました。

また、その舞台となったのは、杉戸町という小さな町です。これからの日本にとっても必要とされることを、小さな町がやっている。そこにも希望への鍵が隠されているようで、魅力を感じました。

小川さん、松尾さん、豊島さんとお会いして思ったのは、シンプルに「3人とも人が好きなんだな」ということ。「人の笑顔が」かな。きっとたくさんの笑顔に出会ってきて、それが糧になっているんじゃないでしょうか。小川さんは生い立ちの中で、親の世代の正義感を強く感じて育って来ましたし、奇しくも松尾さんもそうだった。地域の人の関わり、困ってる人を助けてその笑顔を見るのが好き。そして、次の世代を担う豊島さんはそんなオヤジ世代の2人の姿勢がすごく好き。よき連鎖が生まれています。

「なぜ人は人を救うのか」という問いに対して、小川さんも松尾さんも、明確な答えを持っていなかった。それは「こういうことがあったから」といったストーリーを必要としないからで、「人が困っていたら手をさしのべるのが当たり前」という非常にシンプルな動機で動いている。本能的とも言ってもいい力強さを感じました。

実は、最初、この訓練の話聞いたとき、「杉戸町で大丈夫なのかな？」と思った。埼玉の一部の災害に対応するのではなく首都圏直下型地震の救援拠点としてですからね。アクセスがいいわけでは決していないし、キャパシティーにも限りがある。誰もが認める「ここ」という場所ではない。

しかし、実際に杉戸町を訪れて今思うのは、「ここでもできるなら、どこでもできる」ということ。もっと便利な場所にはもあるかもしれない。でも、彼らは「やろう、やれる、受け入れる」と動いた結果、経験値を手に入れた。その経験値というのは、他のどんな条件よりも強いものだと思います。多くの人が知らないところで、将来にわたって人々の笑顔を守るために「まずやってみよう」と確かな信念を持って動いた実践家たちが、杉戸町だけでない、他のあらゆる地域に希望のモデルをもたらしている。

それを実現させたのは、リーダーの存在です。小川さん、松尾さんはもちろん、避難の受け入れを決めた町長だったり、NPOを活かそうと決めた知事だったり。誰かを助けたいと思っている人はたくさんいます。でもどうしたらいいかわからない、ためらいもある、だからこそ次の一歩を踏み出させるための決断を下す人が必要なんだと強く思いました。

現代社会は、世界的にも苦い経験を多く重ねてきて「リーダー」という存在に危うさやうさんくささを感じている。だからこそ民主主義が世界で支持されているのだけれど、どうしても危機のときには民主主義の限界が露呈してしまう。短時間で事を決断するリーダーが要る。なので危機のときに、間違えるリーダーを選んではいけない。われわれに足りないのは、近い将来必ず訪れる複数の危機に対応できるリーダーを選ぶこと、いなければ求めたり育てたりすることへの強い意志や、切実感なのかもしれません。

## 人間っていいもの

この連載を通じて、いろんな人と語ってきました。彼らとの対話を終えて思うのは、冒頭の言葉とも重なりますが、「つながることは生存に直結する」ということ。身近な人とはもちろん、遠く離れた地域だった



り、外国だったり、いろんな他者とつながることで、リスクを減らすことができる。それは、子供や孫の世代にも関わります。人と人とのつながりというのは、われわれが生きて、未来へとこの世界をつないでいく中で、最も必要なスキルだと思います。

その手段の一つが、「祭り」。今までにお会いした方々は、みなさん「お祭り」的な要素を持っていました。祝祭を通じて、人と人が垣根を越えて、互いの顔を知っていく。「もう

他人ではないよ」—。遠くの人と顔見知りになる、この「他人ではない」という感覚がとても大事で、きっとどんな兵器よりも強い抑止力、平和の礎となるはずだ。

さて、連載のタイトルにもなっている「なぜ人間は滅びないのか」という問いの答えは出たでしょうか。きっと、これまでの連載を読んでくださった方には、自然と伝わっているはずだと信じています。「なぜ人は人を虐げない生きていけないのか」というのが私はずっと追い

かけているテーマですが、それと対をなすのが「なぜ、人は人を助けるのか？」です。人が人を助けなかったら、人類はとっくに滅んでるでしょう。だから本能なのか、遺伝子レベルに組み込まれている生存システムなのか……その答えについては、私はこれからも考えていくことでしよう。でも、答えが出なくても、きっとこれからも、人は人を虐げ、それ以上に人は人を救っていくのです。

（談）  
取材・構成 塩塚夢